

(別紙様式10)

## 2021年度 北極域研究共同推進拠点 共同研究等報告書

【申請区分】:  萌芽的異分野連携共同研究  共同推進研究  
 産学官連携フュージビリティ・スタディ  
 共同研究集会  産学官連携課題設定集会

【研究課題名】: 国際社会における「北極域観光」振興にかかる課題抽出のための会議開催

【研究期間】: 2021 年度

### 【共同研究員】

共同研究員	氏名	所属・職名	専門分野	区分
研究代表者 (拠点内外) (注2)	上田裕文	北海道大学 メディア・コミュニケーション ン院・准教授	景観計画 観光まちづくり	
研究分担者 (拠点外) (注2)	高橋修平	北海道立オホーツク流氷科学センタ ー・所長	地球物理学 極域雪氷観測	
	西山徳明	北海道大学 観光学高等研究 センター・教授	観光開発国際協力、 世界遺産管理	
	小林英俊	北海道大学観光学高等研究 センター・客員教授	CBT、 エコツーリズム	
	本多俊和	元放送大学教授	極北地域、文化人類 学、先住民族	
	森太郎	北海道大学大学院工学研究院 ・准教授	建築環境学 寒冷地・室内気候	
	岡田真弓	北海道大学 観光学高等研究 センター・准教授	先住民族と 文化遺産	
	加藤知愛	北海道大学公共政策大学院 学術研究員	産業創造 非営利組織経営	
	福山貴史	北海道大学 観光学高等研究 センター・博士研究員	雪氷観光創造 資源・人材開発	
	Antti-Jussi Yliharju	Lapland University (Finland) Lecturer	Art&design, Snow&Ice installation	
	Mari Partanen	Oulu University (Finland) Doctoral student	Tourism Geography, Cultural anthropology	
研究分担者 (拠点内) (注2)	田中雅人	北海道大学 北極域研究センタ ー・特任教授	産学官連携、北極域 観光・クルーズ	
	大西富士夫	北海道大学 北極域研究セン ター・准教 授	北極ガバナンス・政 策	

	Juha Saunavaara	北海道大学 北極域研究センタ ー・助教授	北欧・北極域社会と 産業	
研究協力者 (注2)	林直孝	カルガリー大学 文化人類学考古学 科・准教授	文化人類学、先住民 族	
(注3)				

(注2) 拠点内外については、募集要項別添の北極域研究共同推進拠点を形成する3研究施設の研究者リストをご覧ください。

(注3) 計画申請書に含まれていなかった方でも結果的に本共同研究に参画された方(招へい者等)が居られれば、研究協力者として記述して下さい。

### 【研究の内容】

(1) 概要を400字以内(文字のみ)で記載してください。

昨今、グローバルな規模で地球温暖化や Covid-19 など多様な環境変化が見られる中、その変化への対応が期待される地域のレジリエンス向上を見据えた適切な北極域観光振興のための課題を集会開催によって抽出することが本研究の目的である。そのため、近年北極域でも活発に議論され、特に先住民族の自然観を最新のトレンドとするアドベンチャーツーリズムの枠組みの使用を決定し、フィンランド・ラップランドのイナリ地域と国内・北海道の阿寒地域による観光の取り組みの状況をヒアリング調査した上で、本研究は基礎的な比較分析を行った。デスティネーションとしての地域における観光振興の歴史や背景はそれぞれ異なるが、両地域は同程度のスケール感で、どちらも先住民文化や大自然を活用した観光振興が盛んな地域である。こうした地域の特徴とアドベンチャーツーリズムの性質、およびその顧客層がもつ特有の観光モチベーションを統合して分析した結果、本研究が2019年度に既に明らかにした北極域観光振興における8つの課題に属する具体的な重要課題が、コミュニティ、自然環境、そして先住民文化などの視点からそれぞれ抽出された。

(2) 図表や写真も交えて、研究の内容や成果等を2000字程度でまとめてください。

本研究が2019年度に明らかにした8つの課題分野は、①地域文化・先住民の尊重、②コミュニティ優先、③適切な観光振興、④学術研究の推進、⑤ルール・規範の遵守、⑥意識啓発・教育、⑦エネルギー配慮・温暖化対策、そして⑧環境保全であった。この結果に基づき、本年度はこれらの課題抽出の精度を上げるため、イナリと阿寒の両地域へフィールドワークに赴き、関係者ヒアリング等を実施した(写真1、2)。その上で、アドベンチャーツーリズム(AT)のフレームワークを使用し、基礎的な比較分析を行った(図1)。



写真 1 イナリ調査風景 (筆者撮影)



写真 2 阿寒調査風景 (筆者撮影)

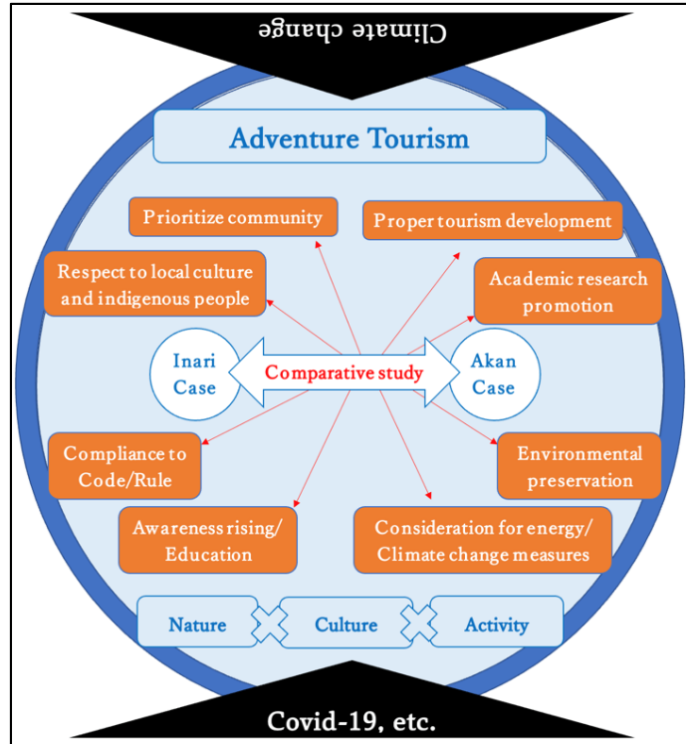


図 1 2022 年度共同研究の概念図

各現地調査から分かったことは、先ずイナリにおいて AT の概念は地域にまだ普及されていないことである。しかしながら、実際のサーミ民族による観光の取組みには、AT の特徴である少人数、本物志向、ユニーク体験、高額消費、地域文化や自然の尊重などが備わっていることが明らかになった。例えば、10km も離れた森林の奥地まで移動し、数百頭のトナカイに囲まれながら焚き火を囲い、温かいコーヒーを飲み、そして大自然の中でサーミ文化について直接教えてもらうというような参加者最大 8 名の高額な観光体験などである。もちろん今後イナリ地域が AT を誘致するかどうかは地域の判断に委ねられるが、少なくともマストツーリズムの 1/25 の人数規模で同程度の経済効果が直接地域に落とされることを勘案すれば、一考の余地は十分考えられる。さらに AT 客がもつ本物志向の目は、近年残念ながら横行する虚偽的なサーミ文化観光と一線を画し、むしろサーミ文化の真正性への着目や文化伝承にも貢献するものと考えられる。

一方で阿寒地域は、2021 年にアジア初開催となる AT 世界サミットのホスト地域となるほど国内では AT の先進地である。残念ながら本サミットはオンライン開催となったが、2023 年には再度北海道でリアル開催されることが ATTA (Adventure Travel Trade Association) によって正式に決定されている。こうした状況下、阿寒では既に自然体験と文化体験、特にアイヌ文化体験のアドベンチャーツアーが複数設定され話題を呼んでいる。自然体験については、例えば入城が禁止されている深い森林にガイドと一緒に入るという特別感が体験できるため高額設定にも関わらず人気である。一方アイヌ文化体験については、地元ガイドの育成を含め、本物志向の顧客対応に向けての今後の課題が散見された。しかしながら、2023 年サミットに向けて AT 振興の機運はますます高まっている。観光分野では、オーバーツーリズムによる地域の弊害が各国各地で問題となっている状況において、少人数でかつ地域と自然を大切にする AT は、世界的な潮流になっていく様相を見せている。

なお本共同研究においては、適切な観光振興について、サステナビリティよりもレジリエンスという言葉在意図的に使用している。この主な理由は、サステナブル(持続可能)な観光とは、一般的には観光客を含めた観光現象をマネジメントする側の文脈で語られるものだからである。つまりこれは、地域外の視点であると捉えられる。一方レジリエンスは、直接地域の視点に立脚して、その向上などへのアプローチが検討されている。今回のような Covid-19 の影響を鑑みれば、どんなにサステナブルな観光のあり方が議論されても太刀打ちすることは難しく、むしろ地域コミュニティのレジリエンス向上の議論を活発化させることが有益であると我々は考えた。その意味において、今世界が注目する AT 市場は海外客であるが、本研究は敢えて潜在的な AT の国内客にも目を向けた。それは、イナリと阿寒の両調査において、そのようなポテンシャルが認められたからである。イナリでは、過去2年あまり海外客が完全にストップした中 10 組の国内客を受け入れた実績があり、また阿寒では AT 海外客用に設定した高額なアドベンチャーツアーに以外にも日本人客が参加しているという。こうした調査結果をヒントに勘案すれば、地域のレジリエンス向上から見る AT の海外・国内客誘致の両可能性の検証については、今後さらなる研究課題となるであろう。

以上を踏まえ、ここで本年度の共同研究を結論づけたい。改めて本研究は、2019 年度プロジェクトで抽出されたグローバルに議論される北極域観光振興における 8 つの課題分野に対して、イナリと阿寒の比較調査研究から導出された具体的な課題を抽出するものである。結果的には表1に示されるように、主に地域コミュニティや先住民の視点からレジリエンス向上を見据えた課題がそれぞれ抽出された。

表 1 北極域観光振興にかかる抽出課題の総まとめ

	2019 年度成果	比較分析に基づく 2021 年度成果
①	地域文化・先住民の尊重	本物志向の AT の実践を通じた真正なサーミ・アイヌ文化の伝承
②	コミュニティ優先	オーバー(マス)ツーリズムとの差別化を図る少人数規模の AT 顧客の選択的な誘致
③	適切な観光振興	生態系のキャリングキャパシティおよび質の高い本物体験を得られる環境の両要件の自然・文化的な総合考察
④	学術研究の推進	事例に基づく地域毎の AT の定義づけの試行を含めた学術論文の執筆と国内外への投稿
⑤	ルール・規範の遵守	サーミ議会による「信頼できる倫理的に持続可能なサーミ観光の方針」の理解の増進と普及拡大
⑥	意識啓発・教育	自国内に向けた各先住民文化伝承の重要性の啓発
⑦	エネルギー配慮・温暖化対策	冬季のサーミ民族観光への影響評価に基づく温暖化への緩和策の意識の醸成と伝播
⑧	環境保全	AT 顧客がもつ高い意識に呼応する地域内の自然環境への配慮

①については、「本物を見る目」をもつ AT 顧客誘致による先住民文化観光の真正性への着目と文化伝

承への貢献する期待である。②は、地域に過度な負担をかけない少人数規模の AT 顧客を地域が自主的にかつ戦略的に選択することである。③は自然の環境収容能力と文化的環境要件を融合的に考察し、本物の観光体験とは何かを明らかにすることである。④については特に国内において AT に関する学術論文は極端に少ないため、研究の蓄積に貢献することである。⑤はすでに問題視されている事項で、2018 年にサーミ議会が採択したサーミ観光の倫理的な指針のさらなる普及に貢献することである。⑥は、海外観光客ではなく、自国民を対象とした先住民文化伝承の重要性の学びの場の提供である。これはフィンランドも日本も同様な課題を抱えていると考えられる。⑦は、温暖化による降雪の遅れや雪質の変化が観光に活用するトナカイファーム経営にも影響を及ぼしていることが挙げられ、観光振興を通じた緩和策の意識の拡大を狙うものである。そして最後の⑧は、AT 顧客のもつ自然へのローインパクトという徹底した価値観に呼応するように地域コミュニティも自然環境に配慮していくという期待である。

以上に抽出した 8 つの具体的課題が本年度の本共同研究の成果である。もちろんこれらはあくまで本集会プロジェクトにおいてこれまで議論してきた基礎的な分析から導出されたものであり、各課題については、将来的な研究の深化が今後期待されるところである。

(3) 本共同研究に関する活動・実績等を下表に記入してください。

①研究打合せ、学会参加・集会(注 4)、調査等

(注 4) 研究代表者、共同研究分担者、研究協力者、招へい者によるもの

日程(月日)	日数 (日)	活動内容	場所	研究代表者、共同研究分担者、研究協力者、招へい者の参加者名・部署	参加者数 (人)
記入例 2020.11.25	2	研究打合せ	東京	北大太郎、北方次郎、北野三郎	3
2021.7.20	1	研究打合せ	札幌	上田裕文、大西富士夫、岡田真弓、田中雅人、福山貴史、森太郎、ユハサウナワーラ	7
2021.9.17	1	研究打合せ	ズーム	上田裕文、大西富士夫、田中雅人、林直孝、福山貴史、森太郎、ユハサウナワーラ	7
2021.11.10	1	ヒアリング等調査	イナリ	福山貴史、ユハサウナワーラ Anne Karhu-Angeli ( Angeli reindeer farm)、Petri Mattus (Reindeer farm Petri Mattus)	4
2021.11.1	3	ヒアリング等調査	阿寒	上田裕文、田中雅人、福山貴史、高田茂(鶴雅リゾート)、香川謹吾(阿寒アドベンチャーツーリズム)、尾田浩(阿寒アイヌシアター運営協議会)、上村兼輔(阿寒摩周国立公園)	8

				管理事務所)、川村純一 (TSURUGA アドベンチャーベース SIRI)	
2021.12.2	1	研究打合せ	札幌 グループ	大西富士夫、岡田真弓、田中雅人、林直孝、福山貴史、森太郎、ユハサウナワラ	7
2021.12.16	3	ヒアリング調査等	阿寒	大西富士夫、田中雅人、福山貴史、高田健右(鶴雅リゾート)、橋本佳之(阿寒アイヌ工芸協同組合)、瀧口健吾(アイヌ文化ガイドツアー案内人)、廣野洋(阿寒アイヌコンサルン)	7

## ②研究論文

研究代表者並びに、研究分担者あるいは研究協力者が著者の関連論文がありましたら可能な限り記載ください。

論文が複数ある場合は、そのフォーマットとして論文1の分をコピーして記載してください。

### 論文1

項目	記入要項	回答
(1)著者名(共著者名含む)、発行年、論文タイトル、掲載誌名、巻・号、ページ数、DOI、出版年月日	福山貴史(2021)『『雪氷観光』に関する基礎研究』『雪氷』83巻、第5号、pp.489-505	

### 論文2

項目	記入要項	回答
(1)著者名(共著者名含む)、発行年、論文タイトル、掲載誌名、巻・号、ページ数、DOI、出版年月日	Shuhei Takahashi (2021): Contribution of scientific results to society: Case studies of U Arctic activity in Greenland and symposium in Mombetsu in Japan. <i>Polar Science</i> 29, pp.1-9	

## ③研究書等著書

著書名・著者名	出版年月	出版社名

## ④特許等出願

特許、実用新案、商標

⑤研究発表(資料添付も可)

発表年月日	発表者名(共著者を含む)	発表タイトル	発表学会等名称	発表地	招待講演(○)
2022.2.22	福山貴史、上田裕文、西山徳明、小林英俊、岡田真弓、田中雅人、大西富士夫、ユハサウナワラ、森太郎、加藤知愛、高橋修平、本多俊和	Extracting Issues for Appropriate Arctic Tourism Development Concerning Community Resilience	第36回北方圏国際シンポジウム	紋別・ズーム	

⑥国際シンポジウム等(資料添付も可)

参加をした主な国際シンポジウム等		
開催時期(年月)	国際シンポジウム等名称	招待講演/議長の有無
2022.2	第36回北方圏国際シンポジウム「オホーツク海と流氷2022」	有

⑦本共同研究に関し実施(主催、共催、後援等)したシンポジウム・集会(注6)等(資料添付も可)

(注6) 研究代表者、共同研究分担者、研究協力者、招へい者以外を含む参加募集によるもの

開催日	実施地 (国、県、市など)	形態 (注7)	シンポジウム・集会等名称	目的及び概要	対象者 (注7)	参加人数 (海外(注8))
2021.12.20	札幌 東京 Zoom	その他	北極域観光課題抽出本会議	2019年度から継続して実施してきた3年間の本集会プロジェクトの集大成としての成果発表会および意見交換	共同研究員	11

(注7)

形態:シンポジウム、セミナー、公開講座、ワークショップ、その他

対象:一般、地域、学生、研究者

(注8) 海外機関に所属するもの

⑧本拠点共同研究に係る成果が科学研究費などの外部資金の応募(予定を含む)やプロジェクトに

発展した例があればご記入ください。

<ul style="list-style-type: none"> <li>・プロジェクト名</li> <li>・代表者・関係者(所属)</li> <li>・関係研究者</li> <li>・予定の場合は、(予定)と記載してください</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プロジェクトの主な財源</li> <li>・金額</li> </ul>	<p>プロジェクト期間</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プロジェクト概要 (目的・期待効果、規模、参加国等)</li> <li>・これまでの本共同研究との関連性 (300字程度)</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・北極域における適切な先住民ツーリズム振興を通じた地域コミュニティのレジリエンス向上のメカニズムの解明と社会実装</li> <li>・福山貴史</li> <li>・採択決定</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・北極域研究加速プロジェクト(ArCS II)</li> <li>・406万円(初年度)</li> </ul>	<p>令和4年～2年間</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・北極域における気候変動やCovid-19による地域の観光活動への影響を評価した上で、先住民の文化や自然観を活用した適切なツーリズム振興による地域コミュニティのレジリエンス向上のメカニズムを解明することを目的とする。特にフィンランド北部のイナリ地域を研究対象地とし、伝統文化の真正性の維持を見据えた現代社会における持続可能なサーミ民族観光のあり方を明らかにし、その観光形態の社会実装を目指す。</li> <li>・これまでの3年間の集会で議論・抽出してきた課題について今後より深掘りする研究として位置づけられる。</li> </ul>

⑨研究成果が一般社会産業界などに還元(応用)された事例や新しい研究分野の開拓や教育活動に反映された事例(資料添付も可)


⑩その他国際研究協力活動事例

事業名	概要	受入人数	派遣人数

⑪学会賞等受賞、アウトリーチ、取材、その他



年月日	所在・出典・新聞名等	受賞者・関係者(所属)	研究課題名・賞名・内容等

記事コピー等を添付してください。

⑫コロナ禍の影響と対策

本共同研究へのコロナ禍の影響と対策(改善・代替策、計画変更、工夫等)、助成金執行率(%)について記述してください。

影響の事象	対策の有無と内容 (計画変更・中止、改善・代替策、工夫等)
特になし	